ファイヤー・ワークス
打ち上げ花火
三沢 真帆

1
「おつかれ、真帆。
コツはつかめたかい？」
「うん、けっこうムツかしいけど
がんばってみる！
あんがとね、すばるん♪」
2
朝練のあと真帆から
連絡があって、教えてほしい
ことがあるから二人で
練習したいとの仰せ。
もちろん二つ返事で
オッケーした。
「やーしかし、さすがに
汗だくだねー★」
「……ごほん」

1
「…ん？
どしたのすばるん？」
パタパタと体操着の裾を
鳴らして風を送る真帆。
いやまぁその、さっきから
ちらちらと――
「…女の子がおへソとか
気安く見せちゃいけません。」
2
「えー？
おへソくらい別にいいじゃん。
ここにはすばるんしか
居ないんだし。」
ちょっと嬉しいことを
言ってくれる…が、
さすがに際どいところまで
持ち上げてた裾を
抑えようと試みて…

1
「んー、でもさぁ――」
真帆が少し
イタズラっぽい
笑みを浮かべる。
「ぶっ!?」
2
「すばるんだって
こーんなぺたんこな
おっぱい見ても
つまんないでしょ？」
心のスキを突かれた視界に
飛び込んできたものは、
まさにぺたんこ――
…もとい未発達だったが、
白く眩しい真帆の胸だった。

1
「なんでね―…
さすがにちょっと
恥かしかったかも★」
微かなふくらみはすぐに
体操着の下に収まったが、
オレのほうの動悸は
激しくなるばかりだ。
「……そ、そうだなー、
つまんない…かなー」
2
そっぽを向きながら
そう言うと、
顔を赤らめた真帆の
頬がぷうっとふくらむ。
「なんだよすばるん、
ハッキリ言うねー★
こりゃ見せ損だねー、
がっかりだー」
「ちょっと見るだけじゃ…
つまんないよ…真帆」
「…え…？」

1
「ん…んと……
み…見たいの
すばるん…？」
戸惑う真帆の瞳を
見返しながら、
無言でうなずく。
2
「……」
暫く押し黙っていたが、
やがてゆっくりと体操着を
たくしあげる真帆。
――再び視界を奪う、
小さなふくらみと
薄桃色の頂き。
「すばるん…
目がえっちだぁ…★」

1
当然ながら、
ここまで来ると見るだけで
収まるはずもない。
「ま…真帆…
さ…触ってみていい？」
2
「ふぇ……
す…すばるんが、
そう…したいなら」

1
お赦しが出たので、
ゆっくりと幼い双丘に
手を添える。
「ん…っ」
微かに喘ぐ真帆。
不快感を与えないように、
優しく撫でさすってみた。
2
「…すばるんの手、おっきいね♪
あたしのちっぱいがすっぽりだ。」
「ちっぱい…って、
どこで覚えてくるのそんな言葉。」
顔を上気させつつ言った
真帆の言葉が、
場を和ませてくれる。

1
「ふ…っ…んっ…ふぁ…♥」
未発達とはいえ、張りのある胸の弾力を愉しむように、優しく優しく愛撫を続ける。

1
「はぅ…ん…あぁ…んっ
…す、すばるんのえっちぃ…♥」
2
とろんとした瞳で
非難じみた声を
洩らす真帆。
しかし嫌がってないのは
一目瞭然だった。

「…ヘンなのに感じる…
なんでだろう…
はじめてなのに…」
1
「ま…まって…
ほら…ちょっと…ストーップ」
2

1
「ふぁ…っ…んんっ…ぁぁ…
ちがうっ…ぁぁ…ぁぁ…
っ…ぁぁ…ぁぁ…♥」
動かしてなの。
配管に沿って指を
滑べ舞ったりして指を
2
実は…ぁぁ…ぁぁ…
ぷっくりとした唇が
ぷっくりとした唇が
ぷっくりとした唇が
ぷっくりとした唇が
ぷっくりとした唇が
ぷっくりとした唇が
ぷっくりとした唇が
ぷっくりとした唇が
ぷっくりとした唇が
ぷっくりとした唇が
ぷっくりとした唇が
ぷっくりとした唇が
ぷっくりとした唇が
ぷっくりとした唇が
ぷっくりとした唇が
ぷっくりとした唇が

1
「あ…っ!?
やだやだすばるんっ…
スパッツおろしちゃ
ダメえっ!」
真帆の大事なところを
覆う薄く強い生地を、
痛くならないよう
努めながら摺り下げる。
2
「ダメだってばぁ…
おまたムレムレで
恥かしいよぉ…★」
真っ赤な顔で
イヤイヤをする真帆
――うん、それは
限りなく逆効果だ。

1
汗の匂いに交じって、
真帆の――女の子の
香りが鼻腔をくすぐる。
2
「ホントだ…湿ってるね
…これって…汗？」
真帆の股間に
ゆっくりと手を伸ばす。

1
「…っ!?
す…すばるんっ…
さ…触っちゃだめだよ…っ」
そうは言っても、
不安の中に見え隠れする
期待感がありありと
伝わってくるので、
説得力は皆無である。
「ぬるっとしてる…
汗――じゃないよね？」

1
宝物を扱うように、
この上なく優しく
濡れた秘所を愛撫する。
「あぁ…っ…ふぁあ…♥
なにこれ…っ…身体が…
ふぁふぁするのぉ…♥」

1
真帆の小さな身体が
かくかくと震えていたので、
しっかりと支えてあげる。
…その間も愛撫の手を
休めない辺りは
我ながらどうだろう…
2
「すばるんっ…！
すばるぅん…っ…♥
あたし…っ
飛んでっちゃいそう…っ！
飛んでっちゃったら…
ちゃんと捕まえてて…
ねっ…ね？」

1

「だいじょぶだよ真帆…っ！
しっかり抱きしめてて
あげるから…
安心して飛べばいい。
――「打ち上げ花火（ファイヤーワークス）」は
自由に空を目指すんだ…っ！」

2

「うん…っ♥
うん…っすばるん…っ！
もっと…もっと強く…
つよくぅ…っ！」

それが何を求めての
懇願なのかも考えず、
真帆の昂りに
呼応するように
指の動きを早くする。

1
「あ…っふぁ…♥
あはぁあんん…っ!!」
2
真帆がひと際
高い喘ぎを放つ。
――絶頂に震える
小さな身体を、
強く、つよく抱きしめた――

1
「は…っ…あは…っ…
花火…はじけちゃったぁ♥」
2
そう言って恥かしげに
微笑む真帆。
口元の涎が艶かしくて、
妙にドギマギとしてしまった。
「あ…」

1

股間から指を離すと、
ぬめった愛液が
ひとすじ糸を引く。
それを見た真帆はパッが
悪そうに舌を出して、

「あたしもえっちだなぁ…
すばるんのこと
言えないよね★」

2

心なし顔を赤らめながらも
開き直ったように、
オレの張り詰めた股間に
目を移して言うのだった。

「ふたりともえっちだから…
つづき…しよ？」

1

「…で、コレはどーゆー状況なのかな？」
「ん？すばるんはこーゆーのキライ？」
どーしてこーなった。
マットの上で真帆の幼い足にペニスを包まれながら思案する。
「おっかしいなぁ…サキの持ってた本では、男の人は足でしてもらうと悦ぶって書いてあったのに…」

2

それは割りと特殊な男性のような気がする。
…てか聞き捨てならない情報がもたらされてしまった…。
「どーする？イヤだったらやめるけど」

3

「ああ…まぁイヤとかじゃなくてちょっとびっくりしただけ…。正直、真帆の足は気持ちいいから…」
「おっけー♪　んじゃ続けるよん☆」
嬉々として足コキにやる気を出す真帆だった――
てか、アソコ丸見えですけど…

1
「…んっ…しょ…いしょ…うと…」
真剣な顔で足を動かす真帆。拙いのは当然だが、それが逆に絶妙な刺激となってオレの理性を苛む。
2
「…うく！」
「――ぶわ!? か…かたくなったよ？」
3
独立した生き物のように蠢くペニスを見て驚きの顔を見せる真帆。
「だ…だいじょぶ…気持ちいいってことだから…続けて、真帆」

1
真帆が一心不乱に
ペニスの愛撫を続ける。
足の指はすっかりと
オレの先走りに
塗れていた。

2
「…むぅ…ん…ふ…」
——ふと気づくと、
微かに荒い吐息が
聞こえてくる。

3
「ん…っ…ふぁ…♥」
息遣いに倣うように、
微かに腰をよじっている
真帆の姿があった。

1
「…どうしたの真帆？どこか苦しい？」
なんとなく理由は判るが、ちょっとしたイタズラ心で問いかけてみる。
2
「ん…と、その…お――」
「お…？」
3
「おまたが…ムズムズして…」
真っ赤な顔で何かを訴えかける真帆。こんなにしおらしい彼女の姿は限りなくレアである。

1
微かな嗜虐心を刺激されて、ペニスがいっそう張り詰める。
「んと…真帆？ちょっと…お願い聞いてくれる？」
2
「ふぇ…お、お願い？」
「真帆の大事なところ――オマンコ拡げて見せて…？」
「お…オマ…っ!?」

1

オレの露骨な言葉に
一瞬顔が引きつったが、
しばらく逡巡
したあと――

「こ…こお…？」

「しょうがないなぁ」
という呟きが
聞こえてきそうな
表情を浮かべると…
両手の指でアソコを
拡げて見せてくれた。

2

「すごい…キレイな
ピンク色だね…」
「そ…そぉかな…
あん…がと…♥」

消え入りそうな声で
お礼など言ってしまう
真帆が、たまらなく
愛くるしい。

1
「…あっ…」
我慢できなくなって
思わず指を伸ばす。
2
少し驚くそぶりを
見せた真帆だったが、
こちらを見返す
眼差しは期待に
満ちたものだった。

1
「ふぁ…あっ…
ん…あうん…っ♥」
優しく愛撫するたびに
艶かしい喘ぎが響く。
すっかり顔を出した
クリトリスを、
強すぎないように
擦りあげる。
2
「あ…っ！
そこ…らめ…っ…！」
肉芽に触れるたびに
身体が跳ねる。
替わりに真帆の足の動きは
すっかり止まっていた。

1
「――ほら…真帆？
足が止まっちゃってる…
自分だけ愉しむなんて
ズルいよ」
2
「はふ…ご…
ごめんねすばるん…っ
…あたしもがんばるね…っ♥」
謝ってくれる
真帆が愛おしくて、
オレのペニスは限界まで
みなぎるのだった。

1
「どぉ…っ？
すばるん…っ♥
気持ちい…？
あたしの足…
きもちいーい…？」
真帆は足で、
オレは指で、
お互いの敏感な
部分を愛撫し
続けた。
2
「うぁ…ああっ…
すごいよ真帆…っ！
真帆も…っ
気持ちいいんだよね…っ？
真帆のオマンコ、こんなに
ぐしょぐしょになって…っ！」

1

指で拡げて
さらけ出された
小さな膣口を、
ひっかくように、
押し込むように
擦り上げる。

2

「うん…っ！
うんうん…っ♥
気持ちいよ…っ！
すばるんの指が
優しくして
くれるから…っ♥
気持ちいいのぉ…！」

1
「はぅ…っ♥
ふわぁぁぁん…っ!!」
2
「は…っ…
あぁあ…っ!!」
真帆が絶頂に
喘ぐのとほぼ同時に、
溜まっていた欲望が
勢いよくぶちまけられた。

1
「は…っ…
あ…はぁ…っ♥」
上気した顔で
荒い吐息を吐く
真帆の白い肌を、
未だ止まらない
白濁液が汚していく。
2
「ふわ…これ…
赤ちゃんの素…？
すっごい熱いねぇ…♥」
「…ごめん…
頭から足まですっかり
精液まみれに
なっちゃって…」

1

「…気持ちよかった？
すばるん♪」

「うぇ…!?
…い…いやまぁ
そりゃ…ねぇ…」

いつもの
イタズラっぽい笑みで
問いかけてくる真帆。
言葉を濁したところで
意味を為さないのは
明白だろう。

2

「でしょでしょ？
…あたしもね、
気持ちよかったの
すごく♥」

嬉しそうに無邪気な
笑みを浮かべる。
その無邪気さを
秘めたまま、やはり
イタズラっぽく舌を
出してのたまった。

「だから…ね？
すばるんと
ちゃんと最後まで、
えっち…したいな♥」

1
手近にある跳び箱に腰を預けて、
真帆の身体を抱きかかえる。
真帆はといえば
腕をオレの首に、脚を腰に絡ませ、
さながらコアラのようだ。
2
「あはは、こうしてると
ヒナみたいだよね♪」
照れや不安を隠すために、
冗談めいたことを口に
したかったのかもしれないが、
ここは敢えてたしなめる。

1
「こーら、今は真帆のことだけ
考えていたいんだから、
他の娘の名前出しちゃだめだろ？」
2
「ふぁ…あは…そっか♪
…ごめん、すばるん♥」
素直に謝ってくれる真帆の、
微かに残る不安を拭い去るように、
背中を優しく撫でてあげる。

1
「じゃあ…いいかな…？
力、抜いてね…真帆」
そう促して、屹立したペニスを
真帆の入り口にあてがう。

1
「う…ん、痛くても…
我慢できるよ…♥」
健気に微笑む真帆の背中を、
安心させるように
ぽんぽんと叩いて――

1
「ん…ううう…う…！」
焦らしたりなど考えず、
そのまま一気に貫いた。

1
「は…ひっ…んん…
あぅう…っ！」
2
眉をしかめ、苦しそうに
喘ぐ姿が痛々しい。
目尻に溜まる涙が、
破瓜の痛みを物語っていた。
「真帆…だいじょぶかい、
まほ…？」

1

「はうう…★
だいじょぶかと聞かれたら
だいじょぶじゃない…けど」

荒く息をつきながら、
弱々しく、それでも真帆は
笑みを見せた。

2

「我慢する…って、言ったもん。
すぱるんと、えっち、するんだもん…っ♥」

駄々っ子の様な言い草が
あまりにも年相応で、思わず
くしゃくしゃと頭を撫でていた。

「うん…ありがと――…強いな、真帆は」

1
初めはさすがに
締め付けがキツかったため、
緩やかな動きだけだったが――
2
「ん…っ…ふぁ…あ…んっ…♥」
――やがて少しずつ、真帆の喘ぐ声に
艶が交じりはじめたので、
次第に動きも大胆になっていく。

1

「ふわぁ…あ…♥
すばるんのおちんちんが…
あたしのなかに…出たり
入ったり…っしてるよぉお♥」

蕩けるような表情を見せながら、
甘い声でつぶやく真帆。
痛みもだいぶ薄れてきたようだ。

2

「ねぇすばるん…♥
すばるんも…気持ちいい？
あたしだけ気持ちいのは
…やだよぉ？」

3

…今でも十分に
刺激を得られるのだが、
そんな嬉しい言葉をかけられたら
抑えようも無くなる。

「うん…わかってるよ真帆
…それじゃお言葉に甘えて――」

1
少し激しく、リズミカルに
腰を動かす。
「は…っ…はうっ…っ！
ああ…っすごいっ…♥
すばるん…っ！
すばるんがあたしのなかで
暴れてるうう…！」
2
際限なく迫る快感に
翻弄されるように真帆が喘ぎ、
…それを耳元で聞くオレ自身も
昂ぶりが止まらなくて——

1
「まほ…っ！
気持ちいいよ…っ！
まほが締め付けるたびに…
ぞくぞくする…っ！」
2
「ほんと…っ？
すばるんも気持ちいい？
嬉しい…っ♥
すっごくうれしい…っ！」
3
二人して貪りあう快感の波も、
やがて絶頂へと誘われる
運命なのが恨めしい――
そんな矛盾した感情が渦を巻く。

1
「すばるん…っ♥
ねえすばるんっ！
今度は二人で…っ！
いっしょに飛んでっちゃお？
ね…？」
2
切なげに懇願する真帆。
その願いに応えるように、
いっそう激しく腰を突き動かす。

1
「…っ…ふわ…♥
あはあぁ…っ!!」
深く繋がったまま、
白濁した欲望を
思い切り解き放った。

1
「うぁは…っは…
あ…はぅぅう…っ♥」
未だ絶頂が治まらないのか、
ぎゅっと目を閉じたまま
かくかくと震える真帆。
2
「はあ…っ…は…っ」
そして、真帆の膣内に
包まれたままのオレのペニスは、
終わりを知らないかのように
精液を吐き出し続けるのだった。

1
「は…ふ…ふぁ…ん…っ♥」
さすがに欲望も尽きた頃、
落ち着きを取り戻した真帆が、
惚けた瞳で繋がった部分を
見下ろす。
2
「あ…あはは…すっごい♪
…お腹の中あったかい♥」
下腹部をさすりながら、
幸せそうに微笑む真帆の顔が
とても大人びて見えたのは
気のせいだろうか。

「…はーっと、ボクの中性
ってやっぱりこんなもの」
ボクはいったいどこに向かって
このゲームの主人公を進ませれば
良いのか迷子。
「…」
「…はっ、ボクちゃん
目覚めたの…?」
「ごめん!」
思わずあやまる。
しまった、そうだ!膣内に
出したのは考え無しだった
だろうか。
「ちゃんとボクの中に出すの
ルールは…ルールを守ってね♥」
…先のルールを無らなければ
そんな未来が――
あるのかな、最終話。